

森林・農業班

ラオス北部における人・牛・水牛の多様な関係と1990年代以降の社会経済変化

高井康弘（大谷大学文学部）

キーワード：牛・水牛、地方食肉流通、放牧、コミュニケーション、儀礼
 調査期間・場所：2005年8月27日 - 9月7日、ウドムサイ、ルアンパバーン

Human - Cattle/Water buffalo Multi-Relationships and the Current Socio-economic Conditions
 in Northern Laos

TAKAI Yasuhiro (Faculty of Letters, Otani University)

Keywords: Cattle/water buffalo, local market, pasturage, communication, ritual
 Research Period and Site: 2005, August 27 - September 7, Oudomxai, Luangpabang

1. はじめに

牛・水牛と人びとの関わりの変容に関する現地調査を、ここ3か年、ラオス北部を中心におこなってきた。両者の関わりを多面的に把握すること、現代の社会経済変化の脈絡に位置づけることを意識してきた。

過去2か年の調査では、牛・水牛をめぐる進行している社会経済的な動きを確認しようとした。1990年代以降の牛・水牛（肉）流通の活発化と林野放牧の困難化が注目すべき変化であることがわかった。流通の活発化は、いわば、牛・水牛を市場に引き出すプル要因である。林野放牧の困難化は、農家が牛・水牛を手放すプッシュ要因である。本年度（2005年度）調査では、この状況を受けて、当地でさらにどのような動きが起こりつつあるかを確認した。まず以下ではこれらの点を記す。

また、本研究では、社会経済変化の把握と並行して、農村の生活現場における牛・水牛と人の関わりを調べてきた。役畜や食肉としての牛・水牛の使用、および牛・水牛をめぐる儀礼慣行が調査項目であった。人々がここ数十年築いてきた生態環境や社会関係に、牛・水牛がどう多面的に関わってきたか、人は牛・水牛との相互関係にある自らをどのように位置づけてきたかを、といった問いに接近するためである。現時点での調査内容と検討の方向性について、つぎに記す。

2. 現代農村における牛・水牛と人々の関わりを取り巻く状況

[1] 1990年代以降の食肉流通の活発化

ルアンパバーンやムアンサイの大市場では、数十人の女性小売商が陣取り、売り棚には新鮮な水牛肉や豚肉が豊富に並ぶ。ナムパークやナーモーなど地方の郡庁所在地の中規模市場にも、毎日輪番で若干名の業者が立ち、肉を売る。肉の行商はバイクに乗って、毎朝、幹線道路沿いの農村を回り、地方の小定期市にも現れる。これらの光景は、現金で食肉を購入し、日常的に消費する生活様式の浸透を示す（注1）。

食肉購入の日常化の背景には、市街や幹線道路沿いへの人口移動と集住地区の形成がある。集住地区付近の川など、乱獲や水質悪化の影響で水棲生物が獲れなくなっている。また、小売や賃金労働をなりわいとする住民たちは、水棲生物捕獲に時間をかけるよりも、現金で食肉を購入することを選ぶ傾向がある。道路整備やモータリゼーションの進行による牛・水牛（肉）の搬送の円滑化は、地元の食肉流通を活発化させるだけでなく、ピエンチャン方面や隣国タイ・中国方面へ、牛・水牛を売却する動きも促進する。

食肉流通への個人業者の参入は、1990 年代以降、公に認可されるようになった。在村仲買や卸・屠畜や小売といった食肉流通の各段階には、新規参入者が相次ぎ、業者間の競争が激化している。とくに従来の生態環境から切り離され、集住地区の新来住民となった黒タイやカムなどマイノリティの人々の参入が目立つ（2004 年度報告書、高井 2005 参照）。

[2] 林野放牧の困難化

食肉流通の活発化とともに、牛・水牛をめぐる状況で近年顕著なのは、自由な林野放牧の困難化である。ラオスでは専門業者による市場志向の大規模畜産経営はほとんどみられない。牛・水牛飼育の担い手は地方農村の小農民であり、一般的特徴的な飼育形態は、林野に牛・水牛を放ち、自由に草や若芽を食ませる「放し飼い」である。しかし、放牧の適地が急速に減少している。ひとつには、放牧適地である焼畑作休閑後 1、2 年の若い林が森林保護目的の焼畑制限により減少している。ふたつめには、水田などの農地の拡大、作付の通年化など農業振興により放牧可能な遊閑地が減少している。その結果、放牧した牛・水牛が農地に入り込んで食害し、弁償沙汰が頻発している（2004 年度報告書、参照）。

[3] 牧場化と牛・水牛大量売却の動き

本年度の調査では、ウドムサイ県所在地ムアンサイからナートゥーイに至る国道 1 号周辺の村々を再び訪ねた。多くの村で確認できたのは、弁償沙汰の頻発化を受けて、行政側が、自由な林野放牧を禁止する一方で、放牧場（スーン）を作って、その柵内に牛・水牛を放すよう、人々を指導し始めたことである。

たとえば、ナーモー市場近くのナムセー村では、菜園主が食害する放牧牛・水牛を銃で撃つトラブルが頻発し、2003 年以降、自由な放牧は禁止された。郡の行政側はみずから牧場適地を調べて、村から数 km の 2 地点の私有林を牧場候補地に指定し、私設牧場の立ち上げを促した。村人はこの牧場に牛・水牛を入れなければならなくなった。私設牧場は、使用費を徴収するか、さもなければ 3 年に 1 頭仔を徴収する。しかし、村人は経費を払ってまで、牧場で飼育することを嫌う。そこで、2003 年以降、同村では牛・水牛を売却し、耕耘機を購入する人が増えている。牛・水牛購入業者は、第 1 に、隣県ルアンナムターの業者、第 2 にムアンサイの業者、第 3 に中国から国境の街ボーテーン、中継地ナートゥーイを経由して来るルーの業者である。

黒タイの集落ナーモーヌア村（59 世帯）の水牛飼育も、従来は自由な林野放牧が中心だった。しかし、2004 年 4 月以降、雨季は牧場飼育となる。村人が適地を探し、村から 3km 離れた 2 箇所の若い林を、十数日かけて柵囲いし、3ha と 4ha の牧場に、それぞれ 30 頭と 40 頭を放している。1 箇所は村の土地だが、もう 1 箇所は他村の土地なので、村人に頼んで無償で利用させてもらっている。

ナーモータイ村（74 世帯）の住民の多数は、上座仏教に帰依していないヤンの人々である。同村は水牛飼育頭数の多い村として周囲の村人や街の関連業者に知られていた。しかし、2004 年 5 月に郡行政が林野放牧を禁止したので、雨季は、朝、水牛を放牧し、食害をしないよう人が水牛に付き添い監視し、夕方に小屋に繋ぎ置くことになった。同村付近には広い土地がないので牧場を作るという選択肢はない。この状況のなか、ここ 1 年で水牛売却が進んでいる。2004 年は村全体で水牛は 200 頭いたが、2005 年 9 月時点で 86 頭に減じている。「水牛が減ったため、4 月 5 月に草抜き作業が必要になった。その日雇いは食事抜きで 1 万 5,000 キープかかる」と話す。水牛はムアンサイの業者が車で買い付けに来る。ナーモー郡ファイオン村の業者が同行してくる時もある。

そのほか、ルアンパバーン県パークウー郡ファーイ村（ルーの集落）にも再訪したが、2006 年 1 月付けで柵囲いの放牧飼育に転換するよう通知を受けているが、適地が無く、牛・水牛の売却が進んでいる。村人は、舗装路面で水牛が蹄を傷めることにも言及する。流通を活発化させる道路整備が、水牛闊歩の適地縮小に拍車をかけている。同村の水牛頭数は 2002 年、2003 年は 125 頭だったが、2004 年時点では 88 頭に減っている。

[4] アーイ（ナーサワーン）村における放牧の状況

森林農業班共同調査地ナーモー郡アーイ（ナーサワーン）村の場合は、2004 年度調査時点で放牧禁止のことを村人が口々に語っており、牧場化あるいは飼育放棄が進んでいるのでは、と予想していた。

同村は2004年10月時点で127世帯であり、水牛は300頭いた。それが2005年9月時点では、水牛は230頭に減っている。中国国境のメオチャイからモンの業者が夜間歩いてやってきて、購入しては曳いて帰る。ムアンサイの業者、ルアンナムターの業者も来る。

飼育頭数は減少しているが、しかし、同村には世帯数比でも比較的多数の牛・水牛がいる。乾季は稲刈り後、圃場に牛・水牛を終日放牧する人が多い。雨季は牛と水牛で異なる。牛は夜間、家屋近くや村はずれの小屋に繋ぎ置く。早朝、放すと付近の広場・道路端で草を食む。夕方には連れ戻す。小屋には藁や刈り草が積まれている。牛を柱に繋ぎ、藁や刈り草を与える。雨季6、7月の午後6時から7時は蚊が多いので焚き火で燻す。

雨季に村人が苦勞するのは水牛の放牧地探しである。焼畑休閑後1、2年の若い林（パーラオ）が放牧適地だが、同村周辺には少ない。焼畑が禁止され、深い古森（パーケー、パードン）が多い。加えて、数年前まで放牧できた隣村の林が、換金作物の作付地になり、放牧利用が許容されなくなってきている。そのなかで村人は水牛が好むヤーユンなどのある若い林をそれぞれ放牧地点として確保している。

たとえば、ある村人は、雨季、牛を村付近で飼う一方、水牛は村の東方徒歩3時間のファイラック村付近のヤーユンの多い若い林に連れて行って終日放牧し、4、5日に1回見に行く。大雨など天候良くない時は曳いて戻す。稲穂の下がる11月頃になると、食害しないよう道路近くに放牧地を移動する。稲刈り後は自村の圃場に放す（糞が肥料となる）。このように季節毎に放牧地を移動する。

村人によって放牧地点はさまざまである。村から比較的近い地（南隣のポンサイトーン村との間の川沿い、西方ファイケム川沿い）に放牧している人もいれば、かなり遠い地（前述のファイラック村付近、南南西方のミーサイ村付近など）で放牧する人もいる。

以上、1990年代以降、牛・水牛（肉）流通の活発化、放し飼いの困難化、近年の牧場化と牛・水牛売却加速化の動きについて述べた。さらに、アイ（ナーサワーン）村における雨季の水牛放牧の現状にふれた。以下では、同村における水牛と人との関わりをめぐる意味世界に接近すべく、水牛の道具的利用とその後の儀礼的措置に注目する。

3. 道具としての水牛とのコミュニケーション

当地の生活では、水牛は水田耕起や運搬や蓄財に重宝な道具であった。一方で、村人は水牛を道具として訓練し、あるいは去勢した。他方で、村人は水牛を道具として利用した後、儀礼をおこなった。水田耕起終了後の慰勞儀礼や水牛売却後の追善供養である。一般論として、人は、自分の身体や他の人や他の生きものやモノなどを、道具として使おうとするとき、それらとのコミュニケーションを仮想することがある。水牛（あるいはそれを操りうるなんらかの意思的な力）に対しても、コミュニケーションを時に真剣に時に形式的におこなう。以下、現地調査で収集した聞き取り内容の一部を紹介する。

[1] 雄水牛の去勢

アイ（ナーサワーン）村では、雄水牛は6歳頃に去勢する場合が多い。4本の脚を縛り、仰向けに寝かせて、局部を2本の棒（*mai hiip toon khwaai*）で挟み、スコップの平らな部分で叩く。去勢後2、3日で容態は回復する。水牛の雄は生後2歳から5歳までは種雄として使える。しかし、6歳以上になると、去勢しないと痩せてくる。去勢することで太り、寿命も延び、役畜として長く使える。また、去勢しないと肩山が大きくなり、去勢すると尻が大きくなる。後者の方が食肉関連業者に売却する時には高く売れる。

[2] 耕起使役後の水牛への慰勞・魂振り儀礼

ラオス北部では水牛の売却が進み、耕運機が普及し始めている。しかし水牛を飼育し、水田耕起に使役する農家もまだ多い。彼らのたいていは耕起終了後、水牛のクワン（魂、マナ的な生命エネルギー）への慰勞・魂振り儀礼（*suu khwan khwaai*）をおこなう。

たとえば、2003年調査時に、ルアンパバーン県ファーイ村（上座仏教徒ルーの集落）で立ち会った同儀礼では、耕起終了後の早朝、主人が、使役した雌水牛とそれに寄り添う仔水牛を、家屋前庭に繋ぎ留めた。主人が水牛の

前に低く座り、花・ローソク・菓子などを用意し、まず次の呼びかけの言葉を述べた。

おお、今日は好ましい日、すべてが豊しく良い日／田畑作をして、牛・水牛の犁耕もうまく終わりました／今からは、仔が大きく育ちますように／おお、死んだりしませんように／雌がたくさん仔を産みますように／田畑作りができ／托鉢、回向ができ／獣たちに慈悲を及ぼすことができ／来世は（この水牛が）人に転生できますように。

その後、モチゴメ御飯・おかず・菓子を水牛の額 2 箇所に乗せ、両角を木綿糸で縛り、そこにバナナ葉を巻いて花を詰めた円錐形の飾りを挿す。（この儀礼では雌の水牛が相手だったので、）巻きスカートと上着を、水牛の背に載せる所作をする。（雄牛なら、ズボンと上着にする）。そして、（水牛の好物である）塩を入れたモチゴメご飯のおにぎり、竹の若葉（ヤーコン）を順々に水牛の口に押し込み、食べさせて、儀礼は終了した。

上記の水牛のクワンへの呼びかけの言葉は、当地の人が水牛に寄せる思いの凝縮された表現と考えうる。言葉の前半部は、道具や財としての水牛に関する実利的な願いである。後半部は、水牛が働き、収穫が上がれば、人も水牛も仏教に貢献でき、功德を積むことができ、それが輪廻転生する靈魂に効果することへの願いであり、上座仏教的色彩が濃く出ている。そこでは、使役する人も、使役される水牛も、輪廻する靈魂としては同質の存在として捉えられている。

同年、ムアンサイ近郊のラックチェット村にて、カムの男性（53 歳）から慰労儀礼の言葉を採集したが、それは次のとおりであった。

今日は、良い日、美しい日／水牛魂振り儀礼をして、水牛が健康で力強くおれますように／もし叩いても、逃げませんように／病気などトラブルになりませんように／来年、仔が増えて、田での作業が勤勉にできますように／美しく、勤勉で、上々の仕事振りでありますように

同村の人々は上座仏教に帰依しておらず、彼の言葉にも、上座仏教的な要素はない。実利的な願いのみが強調されたシンプルな内容になっている。

本年度（2005 年度）の調査では、アーイ（ナーサワーン）村の男性（65 歳）から、慰労儀礼における呼びかけの言葉を聞き取った。氏は雌水牛 2 頭を林野終日放牧放しているが、7 月に入ると水田 1 ha. を作り始める。水牛は 2 歳の時村内で買い、現在 8 歳になる。名前は付けていない。午前 5 時から午前 10 時まで使役し、休ませる。犁耕 (*thai*) に 20 日余り、耙かけ (*bak*) が 8 日、均平棒による整地 (*laat*) が 10 日かかり、耕起が終了する。そこで慰労儀礼をおこない、8 月に田植えとなる。以下、氏が慰労儀礼で水牛のクワンに語りかける言葉を記す。

今日は美しい日、田畑作りが出来上がった日／牛のクワン水牛のクワンの魂振りに最高の日／美しい吉兆の日／今日は盃を花で飾り魂振りする／雨が降り、水牛が苗を夢みないように／雷が鳴り、水牛が畑や田んぼを夢みないように／小石が水牛の蹄に入らないように／泥が水牛の *phai* に入らないように／水牛の足先が畦をつぶさないように／後ろ足が草の根を切らないように／前足がマイフンの木の根やマイライの木の根を切らないように／柔らかい若草を食み、きれいな水を飲み／美しく上々に太りますように

アーイ村（ナーサワーン）村はヤンの集落である。同村の村人は周囲の上座仏教徒ルーの影響を受けて、上座仏教に帰依して久しい（前述のナーモータイ村のヤンによれば、仏教を受容したヤンをヤン・ドゥーと呼ぶ）。ただし、上記の呼びかけの言葉には、上座仏教的な要素は見当たらない。水牛が稲を食んだり、農地を荒らしたりしないよう、農業と共存しながら上手くやって行きたいという願いが強調されていて、同地の水牛飼育者が直面している課題がそのまま現れている。

[3] 水牛売却後の追善供養

アーイ（ナーサワーン）村のある村人は、「水牛は上手に飼ったら 17、18 歳になっても使役できる。死んだら林に埋める。その後は、亡き家族におこなうような追善供養（ヤートナム）はしない」と話す。別の村人は、「水牛が水田耕起に使役できるのは、雄が 5 歳から 10 歳、よくもって 15 歳まで。雌は 5 歳から 12 歳までである。だから、水牛は 10 歳前後で売却する村人が多い」と話す。

2003 年度報告書で、ルアンパバーン県ファーイ村における、水牛売却後の追善供養（ターン・パーカオ、ヤートナム）についてふれたが、アーイ（ナーサワーン）村にも、同様の儀礼をおこなう村人がいる。売却後、功

徳を積み、回向すべく、白米・ちまき（カオトム）・果物・線香・ローソク・花を寺院へもっていき、献上する。

ある村人（69歳）が話すには、水牛に対しては追善供養するが、牛・豚・鶏・アヒルにはおこなわない。牛や豚は生きている間、人が飼って良い思いだけをさせている。これに対し、水牛には使役を強制し、叩いたりして気の毒な目をさせている。水牛は人を助けるのに、人はさらに水牛を屠畜してしまう。さらに、氏は次のように話す。すなわち、屠畜された水牛の魂は、舟着き場で、主人の魂が没したあと、やって来るのを待っている。主人の魂がやってくると、待ち構えていた水牛の魂は、「あんたが殺した」と角で突いてくる。その時に、「いや待て。私はあんたを殺したのはそうだが、ちゃんと回向をした。頭を下げてみなさい」と話す。水牛の魂が頭を下げるとそこから水が滴り落ち、水牛の魂も回向を受けたことを知り、怒りを鎮める。

水牛に対する慰労儀礼や追善供養の前提には、水牛は人の役に立ち、人は水牛に対して負い目があるという認識がある。村人は儀礼的手段をもって、人と水牛の関係を均衡状態に戻し、負い目の解消を図っているように映る。ただし、これらの儀礼は水牛への同情や憐憫の情の発露というよりも、人自身ないしその靈魂の行方への配慮の産物である。言い換えれば、慰労儀礼や追善供養をすることで、人々は懸念なく、水牛を使役し、売却することができる。

最後に、食肉となった牛・水牛と人との関わり、あるいは食肉を媒介にした社会関係に関わるトピックのうち、本年度調査で聞き取りができた事柄について、報告する。

4. 牛・水牛肉食をめぐる儀礼慣行

[1] アイ（ナーサワーン）村の宴慣行と肉調達輪番制

従来、ラオス農村の人々が日常摂る動物性蛋白質源は、身近な水環境に棲む水棲生物であった。しかし、人口増加による水棲生物の過剰捕獲や水環境の悪化、漁撈に振り向ける時間の減少により、市場や行商から肉類を日常的に購入するようになってきた。従来から宴では肉類が食されてきた。宴も近年は頻繁化、奢侈化してきている。

アイ（ナーサワーン）村と隣村クワンカム村には、雨安居期の持戒日前日に水牛を屠り、宴を開いておおいに飲み食いする独特な慣行がある。一般に上座仏教徒の間では、満月、新月、上弦半月、下弦半月の日は、日頃持戒しにくい在家信徒も寺院で説法を聴き、五戒や八戒を守るべき持戒日である。持戒日前日は、各家が持戒日朝に寺院に献上するちまき菓子などを準備日である。雨安居は雨季に出家者が思わぬ殺生をするのを避けるべく寺院にこもる期間であり、ほぼ3ヶ月に及ぶ。安居期間には安居入り、明けの日を除くと11日の持戒日がある。本年度では、当地における雨安居期持戒日前日の宴慣行の概要を聞き取ったので、以下、記述する。

当地では、持戒日前日に水牛を屠畜し、宴を催す。宴日は11日あるので、クワンカム村の場合は11の班が1日ずつ担当する。アイ（ナーサワーン）村では、15夜の満月になる持戒第4日に、籤飯功德積み（ターン・サラーク）祭をおこなう。この日は担当の班を置かず、各世帯は勝手に宴をする。そこで、班担当日は10日となる。これらの日には、両村の担当班が資金を出し合い、水牛を購入し、朝6時頃、両村の境で、協働して足を縛り、喉を突いて屠畜する。通常は、両方の班が半分ずつ資金を出し合い、肉を等分する。持ち帰った肉は、担当班の構成戸がやはり負担した資金量に応じた量を持ち帰り、各家で朝8時半頃から宴を開く、他の村人（男性）は親しい家に行き、御呼ばれにあずかる。次々と宴会をはしごする人もいる。

この慣行には、タイ北部、東北部、ラオスの農村一般と共通する点と、独特な点がある。まず共通点は、宴が関係確認の大切な機会であること、宴では水牛肉の共食を嗜好すること、合資して水牛を購入すること、持戒日は禁欲しなければならないので、その前日におおいに飲み食いする宴を開くことである。独特なのは、雨安居期に挙行されることである。一般に、上座仏教徒にとって雨安居期は他の時期より破戒を慎むべき期間である。また、雨季は水棲生物など他の食材も豊富だし、収穫前で手持ちの現金も乏しく、大型家畜の屠畜・肉消費は少ない。安居明け以降、収穫後の農閑期に慾開放の祝祭に入る傾向がある。しかし当地の事例は、むしろ逆である。その経緯や背景についてはまだ調査できていない。

さて、アイ（ナーサワーン）村の場合、全世帯は通常から10の班（ヌアイ）に編成されている。松浦・フンパン・富田・小手川氏の長期定着組による同村悉皆調査データの全世帯一覧が示すとおりである。現村長（64歳）によれば、まず班長を籤引きで選ぶ。そして、村長と二人の村長補佐が、他の世帯を各班に振り分ける。同村で

は、全世帯を経済状態によって、「ルア・キン（生産余剰がある世帯）」「クム・キン（ちょうど生活していける程度の生産力の世帯）」「カート・キン（飯米にも事欠く世帯）」の3範疇に分けているが、各班が同等の経済力になるよう振り分ける。班長選びの籤引きは現村長任期初年の1980年に第1回をおこない、1984年に第2回、1996年に第3回をおこなった。現在の班編成は1996年以降続いているものである。編成し直さねばならない状況が生じていないので、そのまま来ているという。10の班がどの宴日の肉調達を担当するかは、安居入り日に寺院で籤引きをして毎年決める。

当番班の水牛購入の一例を紹介すると次のとおりである。村長の属する第1班は、2005年は8月27日（持戒第5日前日）の当番になったが、クワンカム村の当番班と協議し、ファイラック村の（やや小さめの）水牛1頭を250万キープで購入した。大きい水牛は高すぎて買えないし、小さい水牛だと皆で食べる量の肉が得られないので、難しい。各班125万キープずつを負担した。それぞれがどの程度の額を負担するかは、その時々々の経済状況を勘案して、ある程度融通を利かすという。骨も肉も含めて70、80kg程度を班では持ち帰り、それを負担金に応じて班を構成する13戸で分ける。「カートキン」世帯には1万キープ程度しか負担金を期待しない。「ルアキン」世帯は15万から20万キープ程度を出すことになる。得た肉を村人に買ってもらい、負担を軽くすることもする。班によっては、水牛購入が経済的に困難な場合もある。水牛肉を調達するのが、望ましいが、豚や鶏にする場合もある。牛は後述のように禁忌である。今年度調査時点では、5回の宴日が終了していたが、そのうち4回は水牛、1回が豚であった。去年は10回中、水牛が9回、豚が1回であった。

[2] アーイ（ナーサワーン）村の牛肉食禁忌

アーイ（ナーサワーン）村、クワンカム村、ボンサイトーン村では、雨安居期に牛の屠畜と牛肉食が禁忌となる。また、大持戒日（布薩日）は、すべての屠畜が禁忌となる。小持戒日の屠畜は可能だが、牛を屠畜は禁忌である。前述した持戒日前日の宴でも牛肉を食するのは禁忌である。比丘沙弥に牛肉を供してはいけないとの禁忌もある。当地には、仏教行事の布施太子ジャータカ祭（ブン・マハーサート）が2、3年に1度おこなわれるが、この際も牛の屠畜・牛肉食は禁忌である。水牛・豚・鶏は屠畜され・共食される。

タイ、ラオス農村で、報告者は今までこうした例に出会って来なかった。アーイ村現村長等によれば、牛は釈尊の母（的存在）であるから、こうした禁忌がある。釈尊が修行中、心身を消耗した際、乳粥で回復した故事が、これに関わるようである。

仏教に関係しない儀礼では、こうした禁忌はない。彼らにとっての大祭（ブンヤイ）は、安居入り、安居明け、布施太子ジャータカ祭、ブンチエン（キンチエン）の4つだが、キンチエンの際は、初日は豚が供えられ、2日目は父母の霊が食べに来る。3日目は客を招いての宴で、水牛・牛・豚など何でも食べられる。村の守護霊儀礼の際は男性儀礼執行者が豚・鶏・焼酎などを供応する。結婚披露、新築祝い、葬儀といった個人の通過儀礼に伴う宴でも、牛肉食は禁忌ではない。水牛・牛・豚・鶏が食べられる。

[5] おわりに

1945年以降、ラオス北部の牛・水牛頭数の増減は戦乱や村間の不和や疫病流行などの要因に左右されてきたはずだが、少なくとも近年の社会経済変化以前の数年は、自由な林野放牧が可能で、人と牛・水牛は互いに快適な状況のなかで相互利用していた。水牛は耕起や運搬に活躍し、牛も含めて施肥や除草などに貢献し、彼らの生態環境が創られた。人は上記した儀礼に端的に表明されるような態度で牛・水牛などに関わり、定期的に牛・水牛などのご馳走を宴で共食することで、人と人の絆を確かめてきた。

1990年代以降の社会経済の変化は、このありように変更を迫りつつある。牧場の指定による森林・農地・放牧地の空間的分離による共存という行政の策は、一般的には妥当と考えうる。しかし、当地の事態は意図どおりには進行せず、牛・水牛売却が進んでいる。水牛売却は耕耘機、化学肥料、高収量作物を使う農業への志向とも重なる。こうした農業の振興と焼畑を禁止しての森林保全策は方向性をひとつにする。しかし、ラオス北部でこの方向の先に地域の人々の暮らしの持続安定があるとは思にくい。タイ農村と同様、繋ぎ置きによる飼育の重労働化、さらに賃金労働の普及と牛・水牛飼育放棄といった道を、ラオスも辿るのか、それとも他の方向性があるのか。もうしばらく経緯を見守りたい。近代化のなかでは、前述したような儀礼については、人の主体性

を呪縛する側面が強調された。村の宴も個人を既社会秩序に縛る機能が強調された。こうした側面に注意しつつ、しかし、新しいモデルに活かせる他者への態度や視点がそこにはないかも考えたい。

(注1) 各年度の市場価格についての聞き取りを継続しているが、2005年度調査時点における市場での水牛赤身肉のキロ当たり小売価格は次のとおりであった。ピエンチャン・ノンドゥアン市場:2万6,000～3万2,000キープ、ルアンパバーン・ポーシー市場:2万2,000～2万5,000キープ(2004年度2万2,000～2万4,000キープ)、ムアンサイ・ノンメンダー市場:2万2,000キープ(2004年度1万9,000キープ)、ナーモー市場2万キープ(2004年度1万6,000キープ)。ちなみに、ルアンパバーン県、ウドムサイ県農村部での田植え・稲刈りの日雇い賃金相場は1万キープであった。1円は約96.9キープ、1バーツは265キープ、1円は0.3656バーツであった。

参考文献

今村仁司 2003、『交易する人間』講談社選書。

園江 満 2005、「ラオスにおける犁の形状と分布 - 農耕文化の視点から」(未刊行原稿)。

高井康弘 2005、「ルアンパバーンの牛・水牛肉流通と黒タイ来住民 - ラオス北部の社会経済変化の一側面」、北原淳編『東アジアの家族・地域・エスニシティ：基層と動態』東信堂、288 - 303頁。

松浦美樹 2005、「ラオス北部における生業活動の変容と人々の生活戦略 - ウドムサイ県ナーモー郡の低地水田村を事例として - 」、秋道智彌代表『アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945 - 2005 2004年度報告書』、総合地球環境学研究所、160 - 171頁。

Abstract

This study focuses on the human - cattle/water buffalo multi-relationships in the current socio-economic conditions in northern Laos. In 2005, the field survey was dealt in the local markets and rural areas of Oudomxai and Luangpabang Province. The findings are as follows:

(1) The local markets have become clearly brisk in the trade of cattle/ water buffalo (the fresh meat) since 1990s in northern Laos. The change seems be urged by such factors as migration, overcrowding, environmental disruption, motorization and urbanization.

(2) It has become difficult for the villagers to put cattle/water buffalo out to pasture freely in the forests and the field in the rainy season, because of the shortage of the suitable areas for the pasturage. The change seems be urged by such factors as the prohibition of shifting cultivation and the promotion of cash-crop agriculture.

The administrative officials try to make the villagers use the fenced-in stock farms for the pasturage. But the villagers tend to sell their cattle/water buffalo in above-mentioned conditions.

(3) Cattle/water buffalo was an important means for the agriculture and transportation. And villagers tend to try to communicate to the means in such rituals as *suu khwan khwaai* and *yaat naam*.

(4) Baan Aay villagers have feast days during the Buddhist Lent in the rainy season. The days before Buddhist precepts days in the Buddhist Lent are the feast days for them. They feast water buffaloes fresh meat in the days. They have a rotation system for the purchase of a water buffalo for each feast day. They put a taboo on the slaughter and the feast of cattle during the days.